

慶長年間の朝日連峯通路に就て

佐藤 榮 太

一、序

羽越國境に聳立する朝日連峯が登山地として開發されたのはまだ近年のことである。其の後營林署や地元で熾んに道路を切開いたので今は登山も非常に楽になつて、朝日礦泉から大朝日までの往復登山は僅か半日の行程に短縮されて了つた。然し連峯の主脈縦走は途中施設の不備や天然の關係等に依り未だ相當の難コースであつて一ケ年の縦走者はまだ幾組と數へる程しかない。

然るに現在に於てさへ相當の難コースたる連峯主脈の處々に舊い道形が明かに認められるのは縦走者の等しく驚異を感じる處であつて、西朝日の東面と以東岳の南面最低鞍部の通稱狐穴との間及び以東岳と戸立山との間には不用意にしても尙見逃すことのない程明瞭に刻まれてゐる。殊に狐穴の北偶小丘には遠くより望む時も明瞭に電光形の道形が現在の道の右手に存在して居る。その實、現地は一面の腰邊までの笹藪であるが詳細に調査する時確實に約三尺ばかり斜面を掘下げた跡が明かである。

幾日かの間草に臥し岩を枕にして雨露と闘ひ簸に苦しめられて縦走を終つた後、昔の人の堂々たるあの交通の跡が不思議にも腦裡にこびり付いて探究慾をそゝる。海拔千八百米乃至千五百米の蜿蜒たる高山を何時の時代如何なる要があつて交通しなければならなかつたか。

二、開鑿年代と當時の狀勢

米澤事情を記した『米府鹿の子』に上杉の將直江山城守兼續が米澤から朝日を越えて庄内へ通する新道を開いたことが僅かに見えて居る。開鑿の年次や、其の狀況等は記されてゐないが、後に記す現存の古文書や當時の狀勢に依つて、慶長三年正月上杉景勝が會津に移封され、直江山城守が其の老臣として米澤に在城するようになった。初年の夏の事業なることが推定出来る。扨て何故に斯る險難の地を殊更に通路を開かなければならなかつたか。茲に少しく當時の狀勢を見よう。

庄内（現在の東西田川飽海の三郡）の地は累代武藤氏の根據地であつたが、義氏の代に及んで惡虐無道の振舞が多く、世に惡屋形と云はれ人心次第に離反するに至つた。是に乗じ周圍の雄藩は互に兵を出して庄内を従へんとし、殊に山形の最上出羽義光と越後上杉景勝の部將村上城主本庄越前守繁長は庄内を中心にして常に争ひが絶えなかつた。斯くて天正十一年三月義光は義氏の將前森藏人等を誘つて叛旗を翻さしめ、俄かに義氏を居城大浦城に攻めて之を亡して了つた。茲に於て其の臣等相謀り義氏の弟丸岡兵庫頭義興を迎えて主としたが、部下の人心定らず、反覆常なき有様に、義興は本庄繁長に援を求め、其の二男千勝丸を養つて義勝と稱し嗣子としたが、同十五年十月、最上義光は、武藤氏の部將東禪寺筑前守等と共に義興を攻めて之を殺し、養子義勝は僅かに免れて

小國城に逃れ、茲に武藤氏は全く滅びて庄内は一時最上氏の勢力下に置かれることゝなつた。

我子義勝を逐ひ出された本庄繁長は大いに怒り、翌天正十六年八月僅か三千の手兵を掲げ、葡萄峠を越えて庄内に侵入し、反將東禪寺筑前守、同右馬頭兄弟並に最上氏の守將中山玄蕃光直等三萬の大兵と大いに千安河原に戦つて之を敗り、東禪寺兄弟は戦死し中山光直は逃れて山形に走つた。此の時豊臣秀吉天下を一統し命を發して干戈を納めしむるに至り、以後庄内は全く上杉家の勢力範圍となり、流石の最上義光も爾來全く庄内から手を引くの餘儀なきに至つたのである。

慶長三年正月、上杉景勝は蒲生氏郷の死後其の舊領を承けて越後より會津に移封され、會津四郡、仙道七郡及び長井田川櫛引、遊佐並に佐渡三郡を以て百二十萬石を領することゝなり、上杉の名將直江山城守兼續は米澤及び庄内を合せ三十萬石を賜ひ米澤城に鎮し、斯くて出羽の驍將最上義光と境を接することになつた。

由來上杉氏は早くより豊臣氏と好み深く、最上氏は徳川氏に恩顧あり、豊臣氏に對してはむしろ恨みさへ持つてゐた。加ふるに領地に於ては以上の如く庄内を中心として長年争ひ來つた間柄である。慶長三年八月、豊臣秀吉薨するに及び、天下の人心自づと二分して物情騒然たる折柄、上杉氏は豊臣方に最上氏は徳川方に與したのは必然であつた。

斯る状態の下に於て、庄内及び新に米澤を領した上杉氏の經營は其の苦心を想像するに難くない。即ち上杉氏の第一の敵は最上氏である。米澤と庄内の中間村上最上の地には宿敵最上義光が蟠居してゐる。隨つて其の連絡には會津から越後に出て庄内に向ふか、小國から村上に出るかの二途あるのみであるが、比較的近い小國越えにしても現在の如き立派な街道は無く幾山川を上り下りしたものである。

一、大里峠（尾折峠）は玉川に西方の國境也。自是越後海老江、淡島、佐渡正面に見る。則是を新道と云、大永元年七月開之、古道は又自是北にあり、越後の關峠より某峠を越え金丸に下り小國川の裾を渡つて八ツ口村へ着き越戸コエドに上り、興庭山を越え小渡へ下り朝日川を渡り、伊佐領を経て白子澤に至り森越御館を過ぎ、小坂或は平地を取る者は小松へ出、或は山路を取る者は田澤に出るなり、是則古歌の條の理なり。

一、興庭山此背西の山腹に越戸村あり、上古の越後街道あり、古歌あり曰く

戸を越て朝日わたりをいさ白子

森越館過ぎて小坂に（米澤里人談）

右の如くであつたから、何れをとるにしても當時に於ては多大の日數を費さなければならず、強敵最上氏を前にしては一朝有事の場合少なからぬ不安を感じなければならぬ。茲に於て米澤及び庄内を直接この配下に持つ直江兼續は、朝日の主脈を越えて一路直ちに庄内へ達する通路開鑿の大土木事業を起したのである。

三、朝日山道の經路

扱て朝日の間道は如何なる經路を選んだか。現今残る處は僅かに一部分であつて、前述の以東戸立間及び以東岳の南面と西朝日東面は明瞭に見られるけれども、其の他は多く藪に覆はれ風雨に崩れて、それと見定め難く、且つ當時の有様をしのぶべき古記録等も發見されてゐない。私は始め其の地形上、野川を遡行して平岩山に登り大朝日より以東への主脈を縦走して、更に戸立、茶畑を経て皿淵澤附近に下つたものかと想像し、朝日礦泉の古川氏や野川及び大井澤方面等の山仕事に従事する土地の人達に此の道形を尋ね求めて居たのであつた。然るに此

の通路は南は御影森山の南側をからんで葉山に向ひ、北は以東より戸立山に延びて更に遠く高安山の北方兜岩附近に道形の遺存するを聞き、豫想以上に延長の大なるに一驚を喫したのである。更に私は過般葉山山麓の草岡村に残る當時の古文書を發見するに及んで、愈々此處を根據にして葉山に登り次で朝日に向つたものなることを確認することが出来た。

庄内すく道御小屋の御番いたすに付ては山におゐて檜物材木かり以下諸役令免許候尤田地迄も不抱百姓にあらざる者これあらばいか程も引うつし無油斷御番可仕候たれ成ともよこあひそのさわり致能まじき者也

以上

慶長四 正月廿六日

春日 印

源右工門とのへ

(朝日古文書其の一參照)

文中の春日は上杉藩米澤奉行及び郡代たりし春日右衛門元忠であつて草岡村源右衛門なる者に所謂庄内新道の番人を申付其の役得として葉山に於ける諸權利を免許したものである。

猶まげし役の儀ものがは入に而仕候分は其身に申付候以上

庄内新道に居申候源右工門猶以久迄も引越御小屋の御番堅固に可仕候由申に付て野河山々川共に一圓預置候彌々御馳走可仕者や

慶長四 八月十三日

春日 印

源右工門殿へ

(朝日古文書其の二參照)

葉山には葉山神社鎮座し古來相當の信仰登山者あつたらしく、先づ此の道を利用して山道を開くことが適當な

慶長年間の朝日連峯通路に就て 佐藤

五

案内者を得る上にも便利が多かつたこと、思はれる。現在參謀本部五萬分の一圖上葉山神社より西北燒野平に向つて延長してゐる點線道は當時の名残でなければならぬ。

以東より北方は兜岩に道形の存することに依つて大鳥湖畔へは下らずに戸立、茶畑、芝倉、葛城、高安等の山々を連ねたものであることが判るが、兜岩からは右方八久和に下つたものか左方繁岡に下つたものか未だ確める機會を得ない。或は八久和部落は庄内方面の起點であつて通行の際の人夫を此處に駐在せしめ、現在の部落はそれ等人夫の土着したものではないかとも想像される。

以上の經路即ち草岡より葉山に登り御影森、大朝日、寒江、以東、戸立、茶畑、葛城、高安等二十數座の山々を連ね八久和或は繁岡に下る間、今地圖上にて目測するに連嶺少くも三十里の行程はある。然も三百三十餘年後の今日尙明瞭に残るあの立派な電光形の道形を見ては可成りの大工事だつたことがうなづかれ、軍馬軍兵の往來も相當あつたことを想像するに難くない。尙之等の工事は全く秘密裡に施行されたものと思ふと一層驚異である。

四、慶長の役と朝日間道

此の通路開鑿に依つて米澤と庄内との距離は著しく短縮され、上杉氏にとつて多大の便益を得るに至つたことは必然であるが、やがて慶長五年天下分目の關ヶ原合戦起り、上杉氏と最上氏は茲に再び干戈を交ふるに及んで、此の間道は一層の重要性を帯ぶるに至つたことは想像に難くない。以下少しく關ヶ原の餘波戰たる上杉、最上兩氏の合戦を概観しよう。

慶長五年九月五日、米澤城主直江山城守兼續は兵を三手に分け自ら將として中央軍を卒の米澤を發して、長井、荒砥を進軍、最上義光の屬城たる畑谷城に向ひ、右翼軍は本村親盛、横田旨俊、篠井泰信等を將として中山口より上ノ山城に向ひ、左翼軍は中條三盛の兵を以て宮宿左澤方面に進發した。直江兼續の中央軍は十三日畑谷城を攻め、城將江口五兵衛光堯戰つて之に死し、兼續は進んで長谷堂城を攻圍した。城將志村高治克く禦ぎ、義光は楯岡光直清水義親等をして之に應援せしめ勝敗容易に決せず。斯る折柄豫て直江兼續の牒報を受けた庄内東禪寺城主志駄修理義秀及び大浦城主下次右衛門吉忠は、最上川口及び六十里越より相呼應して進撃し最上氏の背後に出で、行く／＼其の諸城を攻め落し、谷地、寒河江、白岩を降して果ては中條三盛の軍と合し左澤、山邊に迫り、義光の本據山形城も既に危しと見えた。流石驍勇の義光も大いに恐れをなし其の子義康をして援を伊達政宗に乞はしむるに至つた。政宗は叔父政景に三千の兵を授けて赴き援けしめ、斯くて義光は伊達の援兵と合して廿九日兼續の兵と大いに長谷堂城外に戦ひ直江の部將上泉泰綱を打取り自らも亦兇の筋金に銃丸を受けた程である。

戰正にたけなはの十月朝日、關ヶ原に於て西軍大敗の飛報が兼續の陣營に到達、茲に於て兼續は天下の大勢既に決したるを覺り軍を納めて米澤に引揚げ戦は一先づ一段落を告ぐるに至つた。此の時庄内より進撃した志駄義秀は逸早く逃れて東禪寺に歸つたが、谷地城を守備して居た下吉忠は飛報の到來したるを知らず、遂に最上軍に捕虜となり後義光の旗下に屬することゝなつた。

東禪寺に逃れ歸つた志駄義秀は河村長藏と相謀つて更に抗戰の準備を怠らず、義光は降將下吉忠をして荐りに之を誘降せしめたが二人は敢て屈する色もない。茲に於て義光は志村高治をして狩川、余目、藤嶋諸城の戦備を整へしめ、更に嫡子修理大夫義康を總大將として月山越にて庄内に進撃した。先づ狩川にて部署を定め義康自ら

は里見越後、楯岡豐藏等を卒ひ、降將下吉忠を先鋒として大手口に、義光の三男清水義親は楯岡甲斐、氏家左近將監等を卒ひ、東方砂越口より、北方よりは志村伊豆、鮭延典膳等鳥海山麓の菅野城を落して東禪寺城に進撃、斯くて折重つて東禪寺に亂入した。志駄、河村克く禦ぎ流石の大軍も容易に之を抜くことが出来なかつたが、下吉忠の勧誘に依つて遂に和を結び三月四日（或は四月廿四日）城を開け渡して河村は父彦左衛門の領地佐渡へ、志駄義秀は米澤に赴き茲に全く出羽合戦も局を結ぶに至つたのである。

以上が關ヶ原の役當時に於ける上杉對最上合戦の概況である。

始め慶長五年三月上杉景勝石田三成と結んで兵を集むるに當り、上杉の將直江の軍使は朝日山中を通つて頻りに其の所領たる庄内の東禪寺（酒田）、大浦（大山）の諸城と往來した。此の事を逸早く最上義光に注進したのは朝日岳神社の別當大沼（西村山郡大谷村）の大行院である。依つて義光は之を賞し今後も永く朝日の別當として丹精を抽んずべしとの左の如き書付を下して居る。

今度景勝軍勢朝日山林下間道伐開亂入之旨令注進條神妙之至仍任舊例朝日別當永令修勢國家鎮護可抽丹精者也

慶長五年八月一日

大沼別當 大行坊

義 光 花 押

庄内軍が戦起るや、逸早く最上軍の背後に進出して獨り向ふ處敵なき有様の目曜ましい活躍を爲し得たのは、一に此の朝日の間道に依つて本軍との敏捷な連絡を爲し得たからではあるまいか。更に志駄義秀は戦終つて其の退路を断たれるに至つたにも係らず直ちに此の間道より東禪寺へ歸城し、庄内の動搖を静めて最後の決戦を試み

ることが出来たのである。

五、志駄義秀の朝日越考

北陸の驍將佐々成政の沙羅々々越えは我國戰史上將又交通史上有名な物語であるが、わが東禪寺城の勇將志駄修理亮義秀の雪中朝日越えは殆ど知られてゐない。以下唯一の通行記録として志駄義秀の朝日越えを考證して見度いと思ふ。

『山形縣史』慶長六年辛丑三月四日の條に左の如く記されてゐる。

是より前志駄修理義秀酒田城を守り敢て屈撓せず、最上義光、男義康、志村高治等をして之を攻めしむ。秋田實季由利の諸將と來り會し四面攻撃す。降將下吉忠義秀に諭し開城退却せしむ、是の日義秀城を開き朝日山中を過き米澤に旋る。義光乃ち高治をして酒田城を守らしむ、義光又小野寺義道を横手城に攻めて之を降す、是に於て東國全く定る。

以上に對する引證として

(志田系圖)

修理義秀 景勝公御代庄内大寶寺ノ城代命之後庄内酒田城ニ移ル、會津エ御國替之上秩五千石賜之、慶長

五年庄内擾亂ノ時翌年三月四日迄相抱謀略ヲ以城ヲ退ク、寛永九年八月十六日卒ス

(寄合帳)

庄内新路案内仕ニ付而役儀用捨之書付春日右工門方被出候、今以其通ニ候間如先代役儀等令免許者也

慶長年間の朝日連峯道路に就て 佐藤

慶長年間の朝日連峯通路に就て 佐藤

慶安四年十月十二日

朝岡判
來次判

二郎右工門 (草岡村)

與三右工門

甚右工門

平内

(此四人ハ志駄義秀退却ノ節山中ノ案内者也)

右に依れば志駄義秀が東禪寺城を捨て、米澤に逃るゝに際し朝日の山道を通つたと斷じ、寄合帳にある宛名草岡村四人の者を其の際の案内者なりとして居るが、慶長六年以後慶安四年迄は五十三年の日子を閲し、而も文中に先代の如くとあれば之等四人が案内者に非ざるは明かであつて、尙又其の先代を案内者とするも果して志駄義秀の案内者とするは早計に失すると思はれる。茲に私は左の文書を示す。

庄内直路案内仕ニ付而春日右工門方萬役儀用捨の判形見届候於以來ニ檜物材木框師役狩まさかり役如前々之令免許候并野川入山川共ニ一圓源右工門ニ預置所如件

慶安四年十月十二日

來次印
朝岡印

草岡村中

(朝日古文書其の三参照)

之を要するに新路開鑿の當初は源右衛門一人を番人として山の諸權利を許して居たが、慶長五年の變起り、上

杉藩では此の山道の重要性に鑑み更に幾人かの番人を追加して警戒に當らしめて居たものらしい。斯くして五十餘年を経過し慶安四年に至つて、草岡村と之等の人の後繼者との間に從來の諸權利に就て紛糾を生じたる結果、米澤藩にては『役儀前々の如し』と裁定し双方に下附したる判決書と見るのが至當ではあるまいか。但し東禪寺開城の後如何なる経路をとつて米澤に赴いたかはつきり記録が残つてゐない以上、或は此の時も朝日越をして居ないとは限らない。

庄内遊佐郷の郷士菅原左馬介政次が慶長十四年四月山之任書一通を自記して其の子次右衛門に與へた。其中に左の如く記されてゐる。

一、慶長五年ヨリ弓矢出申候、信田様ハ最上陣ニ被存立候ハ九月十一日、御陣ヲ被爲引候は同閏十月四日ニ而御座候、大浦下殿者最上へ御心替被成候、信田様ハ川之口モ六十里モ海道不罷成候故櫛引大鳥ノ切通ヲ御歸被爲候、菅原左馬介ハちたい山本ノ者ニ而候ヘバ切通ノ御先立御奉公申上候ヘバ加増百石被下候事、加様ニ御忠進申候、其後慶長六年辛丑四月二日ニ鮭延典前殿先馬ニ而下口ヨリ菅野城ヲ御セメ被成候へ共菅野ハ落不申候、同十一日ニ菅野砂越ノ人数ハ東禪寺へかさなり申候而同月廿日に信田様御出被成候而永井へ御越候事

之に依つて志駄義秀は最上陣より東禪寺へ歸城の際こそ朝日越の險を敢行してゐることが明かである。即ち關ヶ原の情報至るや形勢全く逆轉して、最上勢の爲に逸早く最上川口及び六十里越の兩街道共封鎖され全く庄内への退路を斷たれて了つた爲に、義秀は直江の妻と共に一先づ米澤に赴き次で朝日山中を越えて東禪寺へ歸城したものである。菅原左馬介の記録は自らの實見體驗を記述し其の子に申送つたものであつて信するに足るものと思

ふ。

關ヶ原の敗報陣中に達し、直江兼續が長谷堂城の圍みを解いて米澤に引揚げたのが十月朔日、志駄義秀が朝日を越えて東禪寺へ歸城したのが閏十月四日、此の間約一ヶ月、現行陽曆にすれば十一月から十二月の候である。あたかも山岳氣象の最も險惡な此の季節に於て庄内の狀勢を案じつゝ、殘兵を引具して行程三十里の此の高山上を辿る志駄義秀の有様は如何であつたらう。雪量の多い朝日山系は此の季に入れば積雪既に數尺に達する。連日の吹雪も山上では珍らしくない。今日私達は科學の粹を盡しての山登りに於てさへ此の季の登山は最も危險としてゐる。當時山中には如何なる設備があつたか、義秀は如何なる用意の下に之を突破したか。今私達の最も知らんと欲する處であるが何等詳細を知るべき古記録の發見されないのは遺憾である。(完)

參照地圖 五萬分ノ一

赤湯、手ノ子、朝日嶽、大鳥池

備考

東禪寺 現在ノ酒田市

大浦 大山町

大寶寺 鶴岡市

米澤 舊米澤領即ち置賜一市三郡

永井 置賜地方の舊稱

最上 村山地方一市四郡

小國城 西田川郡福榮村にあり